

うらしゆく いせき
浦宿 B 遺跡

目 次

I 位置と環境	49
II 調査に至る経過	50
III 調査の方法	51
IV 発見された遺構と遺物	52
1 壱穴住居跡と出土遺物	52
2 遺物包含層と出土遺物	55
1 層出土遺物	55
2 層出土遺物	55
3 層出土遺物	57
5 層出土遺物	57
6 層出土遺物	60
7 層出土遺物	62
1 ~ 5 層出土遺物	65
6, 7 層出土遺物	66
自然遺物	67
V 考察	68
VI まとめ	71

写真図版

調 査 要 項

遺 跡 名：浦宿B遺跡（宮城県遺跡登載番号73028、遺跡記号UX）

所 在 地：宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜浦宿

調査理由：店舗開発

調査主体：女川町教育委員会

調査担当：宮城県文化財保護課

佐藤 則之・須田 良平・佐藤 憲幸（確認調査）

菊地 逸夫・須田 良平・村上 裕次（事前調査）

調査期間：平成17年7月8日（確認調査）

平成17年8月29日～9月15日（事前調査）

調査面積：約350m²（確認調査）

335m²（事前調査）

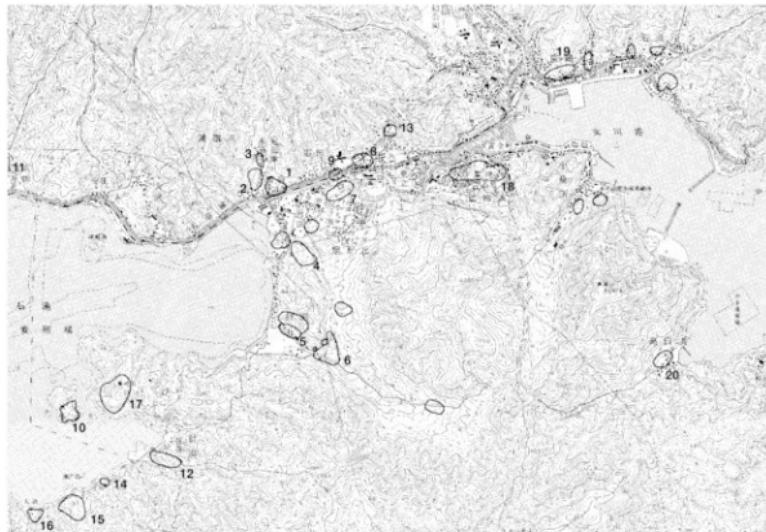
I. 位置と環境（第1図）

浦宿B遺跡は宮城県牡鹿郡女川町浦宿浜字浦宿に所在する。遺跡は女川町の中心部にある町役場から西に約2km離れた地点にあり、JR石巻線浦宿駅の東方約100mの所に位置している。

女川町は牡鹿半島の基部に位置する町で、東から女川湾が、西からは万石油が湾入して大きく括れるような地形となっている。

万石油は、南側を牡鹿半島、北側を北上山地から派生する丘陵地によって囲まれた内海で、東西4.5km南北2.5kmの広さをもつ。石巻市渡波付近で開口し、その幅は現在は約100mであるが、縄文時代は北側の丘陵を越えた低地帯まで海が広がり「古稱井湾」を形成していたと言われている。

浦宿B遺跡はこの万石油の最も奥まった部分の北岸に位置する遺跡で、北から延びる小さな舌状丘陵の西斜面から東斜面に立地している。遺跡の西側は尾田峰沢に画され比較的急な傾斜地となっており、東側は北西にむかって入り込む小さな沢によって開析された緩やかな沢地形を呈している。遺跡の標高は最も高い丘陵の頂部付近で約12m、最も低い南東の丘陵端で約2mである。なお、遺跡の南端は国道建設等により失われている。



No.	道跡名	立地	種別	時代	No.	道跡名	立地	種別	時代
1	浦宿B遺跡	丘陵斜面	貝塚	縄文前・中・後・晩・古代	11	志頭遺跡	丘陵裏	散布地	縄文中
2	浦宿尾田峰貝塚	丘陵裏	貝塚	縄文前・晩	12	鶴原遺跡	丘陵裏	散布地	旧石器・縄文前・中
3	浦宿C遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前	13	照着寺境内遺跡	丘陵	散布地	古代・若世
4	尾田貝塚	丘陵	貝塚	縄文前・中・後・古代	14	音木浜遺跡	丘陵裏	貝塚	奈良・平安(製塙)
5	針ノ浜墓地下遺跡	丘陵	散布地	縄文前・中・後・古代	15	星敷浜貝塚	丘陵	貝塚	縄文前・中・後・晩・古代(製塙)
6	花畠遺跡	丘陵裏	散布地	縄文・古代	16	大丸遺跡	丘陵裏	貝塚	古代・近世(製塙)
7	十二神遺跡	丘陵裏	散布地	縄文前	17	鶴松山貝塚	丘陵裏	貝塚	縄文前・晩・弥生・古代
8	門面ガード脇遺跡	丘陵裏	散布地	縄文前	18	内山遺跡	丘陵	散布地	縄文中・後・晩・古代
9	門面・小田遺跡	丘陵裏	散布地	縄文前	19	宮ヶ先遺跡	丘陵裏	散布地	縄文中・後・晩・弥生・古代
10	鳥島貝塚	島嶼	散布地	縄文前・弥生・古墳・古代	20	高丘浜遺跡	丘陵	散布地	縄文前・後・古代

第1図 浦宿B遺跡の位置と周辺の遺跡

これまで発掘調査等は行われてないが平成二年に女川町教育委員会による分布調査が行われ、西側斜面付近でハマグリ・アサリ・魚骨・貝骨などの自然遺物が縄文時代前期の土器とともに採集されている（第2図★地点）。この周辺の畑地からは耕作の際にハマグリ・アサリなどの貝層が厚く堆積していることが確認されており、その範囲は約40平方メートルであるという。

また、今回の調査地点付近の東斜面からは縄文時代前期を中心に中期・後期・晩期の土器や土師器・須恵器が多数採集されている。

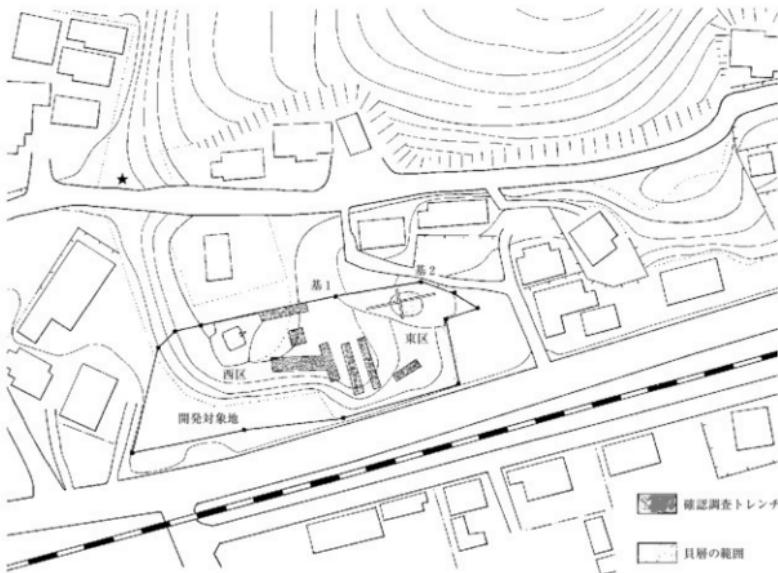
遺跡の西側に接して北の丘陵に源を持つ尾田峰沢があり、この沢を挟んで対峙する丘陵の東斜面には縄文時代後期から晩期の遺物が豊富に出土した尾田峰貝塚がある。

万石浦周辺は、縄文時代早期末まで遡る梨木畑貝塚を最も古いものとして平安時代に至るまでの各時代・各時期の遺跡や貝塚が湾を取り囲むように数多く分布しており、この内湾を生活の基盤として長い間人々の生活が営まれ続けたことが窺える。

II. 調査に至る経過

女川町教育委員会は、浦宿B遺跡周辺に店舗建設が予定されていることから、平成17年6月6日付けでこのことについての協議書を提出した。これに対し、平成17年6月24日付けで当該地での遺構の有無を確認するための調査が必要と回答し、平成17年7月8日に確認調査を実施した。（第2図）

調査は開発対象地内で旧地形の損なわれていない部分について8ヶ所の試掘溝を設定し、重機によ



第2図 調査区と周辺の地形

る表土除去、ケズリによる遺構確認作業を行い、丘陵の西端部で堅穴住居跡を、北東の谷部で繩文土器を含む遺物包含層を検出した。

この成果を受けて開発側・女川町教育委員会・文化財保護課は協議を行い、この部分について開発対象地から除外することが可能かどうか検討したが、計画通り施工し事前調査を行う事となった。

平成17年8月17日付けで発掘通知が提出され、事前調査は8月29日～9月15日に行なわれた。

調査は、前回の調査で確認された堅穴住居跡周辺（西区）と遺物包含層周辺（東区）のみを対象に行い、検出された遺構の掘り下げと遺物包含層の内容把握に努めた。その結果、遺物包含層は土器類をはじめとした人工遺物ばかりではなく、魚骨・獸骨などの自然遺物を多量に含んでおり質・量ともに優れ、保存状態もきわめて良好であることが明らかとなつた。このことから再度9月2日に協議を行い、事業者の協力を得て、建物の建築位置等を変更し、遺物包含層部分を開発対象地から除外し現状保存するとの結論を得た。

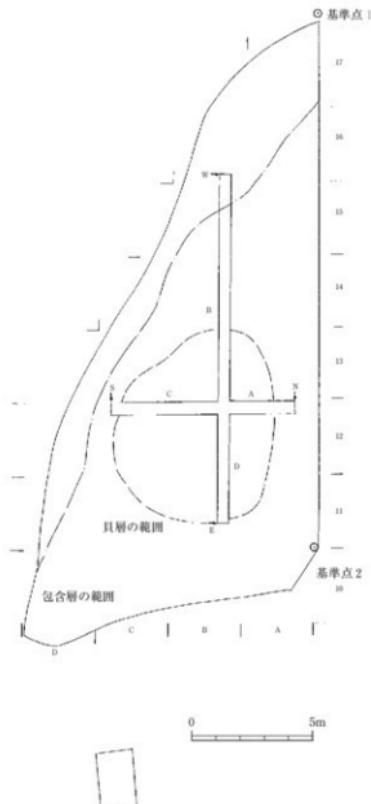
このことにより、当初予定していた東区部分については遺物包含層の層序の確認のみにとどめ、全体の掘り下げは行わなかつた。

III. 調査の方法

調査は、はじめに堅穴住居跡と遺物包含層が検出された周辺と、開発対象地の北側に隣接し防護柵の建設を予定している部分について重機により表土を除去し、包含層の延びや他の遺構の有無について確認作業を行つた。その結果、検出された遺構は当初の堅穴住居跡一棟のみであること、遺物包含層は開発対象地の北東部の谷地全体におよび調査区外にまで延びることが明らかとなつた。

堅穴住居跡については断面図を作成しながら掘り下げ、完掘後は写真撮影と平面図の作成を行つた。

また、包含層部分については表土除去した後に、あらかじめ堆積層の層序を確認するため、傾斜の方向とそれに直交するサブトレンチを十字に設定して掘り下げを行つた。サブトレンチは交差する部分から北側をAトレンチ、西側をBトレンチ、南側をCトレンチ、東側をDトレンチと称し、遺物はそれぞれの層毎に取り上げた。



第3図 東区（サブトレンチとグリッド配置）

さらに、層序の確認後は任意の基準点（基準点1、2）をもとに基準線を設けてグリッドを設定し、グリッド毎に層序にしたがって掘り下げを行った。（第4図）

なお、三者間の協議により包含層部分は保存されることとなったため、掘り下げを行ったのは協議前に着手した包含層東端の一部のみである。

基準点1（X=-173294.686・Y=51489.432）

基準点2（X=-173289.573・Y=51510.434）

IV. 発見された遺構と遺物

発見された遺構は西区で竪穴住居跡、東区で遺物包含層がある。以下それぞれの遺構と出土した遺物について記述を加える。

1. 竪穴住居跡と出土遺物（第4図）

丘陵の西端部で同位置で建て替えられた竪穴住居跡2棟（SI-01a旧.SI-01b新）が検出されている。SI-01bはSI-01aの北壁部分を外側に約60cm拡張して作り直している。

【SI-01a竪穴住居跡】

【平面形・規模】 平面形は正方形で、規模は東西4.9m、南北5.0mである。

【壁】 西半は削平されているが、東壁の残存状況は良い。周溝底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁で約40cmである。

【床面】 風化した粘板岩の岩盤を掘り、そのまま床としている。床面はほぼ平坦で西に向かって緩やかに傾斜する。

【柱穴】 床面及び周溝内から合計17個のピットが検出され、位置的にP1～P4が主柱穴と考えられる。柱穴は径約30cmの円形を呈し、深さは35～50cmである。P1～P3から柱痕跡が検出されており、それによれば柱は円形で直径約20cmである。柱間寸法は東西が215cm、南北が285cmである。

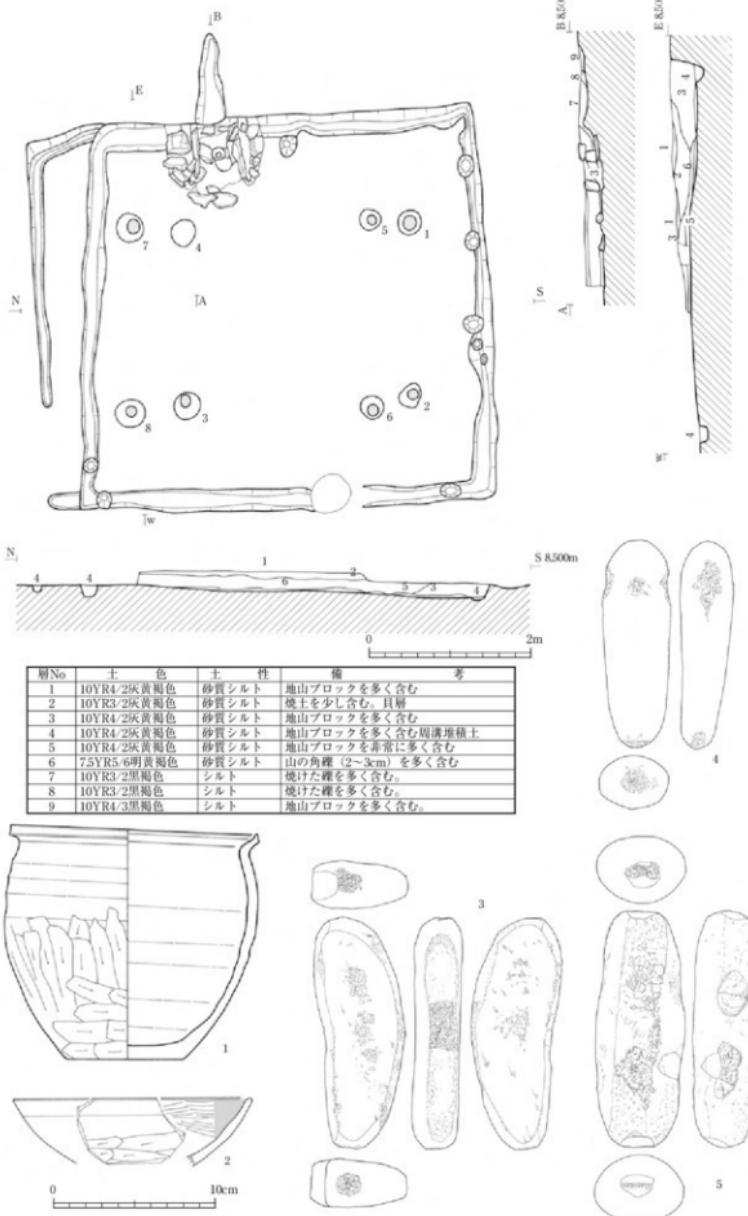
【カマド】 東壁北寄りに付設されている。燃焼部と煙道が残存している。燃焼部は幅60cm、奥行き80cmほどである。底面には扁平な粘板岩を敷き詰めている。奥壁直下の敷石の下は若干掘り窪められており、周溝へと続く。燃焼部の側壁は板状の粘板岩を芯材とし、粘土を貼り付けて構築している。また、燃焼部内部からも板状の石が出土しており焚き口付近の天井部も石組みされていたものと考えられる。燃焼部底面中央の敷石の上からは土師器の甕が逆さに伏せた状態で出土しており支脚と考えられる。煙道は奥壁から105cmほど東に延びる。煙道の底面は先端に向かって緩やかに上がる。煙出しピットは検出されなかった。

【周溝】 全体に巡っている。幅20～30cm、深さ5～15cmで、堆積土は灰黄褐色のシルトである。

【SI-01b竪穴住居跡】

【平面形・規模】 南北に長い長方形を呈し、規模は東西4.9m、南北5.6mである。

【壁】 北東隅から北西隅までの北壁部分が拡張され、それ以外の部分はSI-01aと共有する。西半の残存状況は良くないが、壁高は北東隅で周溝底面から約20cmである。



第4図 壇穴住居跡と出土遺物

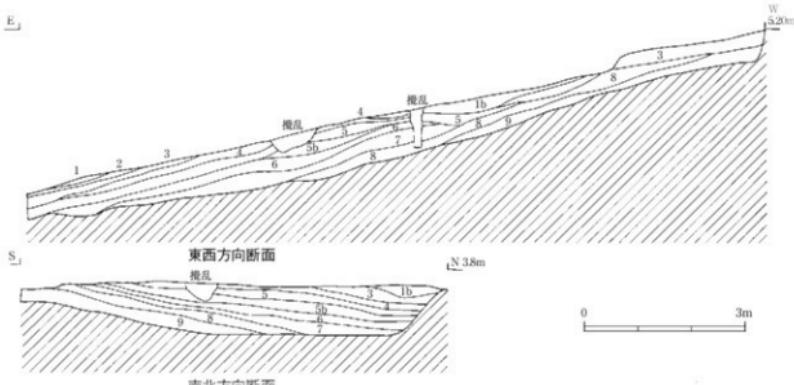
【柱穴】位置的にSI-01aの主柱穴を北に約50cm移動して掘られたP5~P8が主柱穴と考えられる。柱穴は径約30cmの円形を呈し、深さは30~40cmである。すべてのピットから柱痕跡が検出されており、それによれば柱は円形で直径は約20cmである。柱間寸法は東西230cm、南北300cmである。

【周溝】全体に巡っている。拡張された北片の部分は幅約20cm、深さ5~10cmで、堆積土は灰黄褐色のシルトである。

【堆積土】廃絶後に堆積したもので、6層に大別される。基本的には地山の岩片を多く含む自然流入土であるが、2層はアサリを主体としてオオノガイをわずかに含む貝層で、3層が堆積した段階で住居全体の窪みを利用して廃棄されたものと考えられる。貝殻の他に遺物はなく時期について特定できるものはない。

【出土遺物】新しい住居に伴う。カマド、床面、堆積土中などから土師器（甕・壺）、須恵器（壺）、石製品（砥石・叩石）などが出土している。

1は土師器壺で支脚として使用されていた。製作にロクロを使用しており、体部下半にはヘラケズリが加えられている。2は土師器壺で床面から出土した。体部下半以下を欠損するが、製作にロクロを使用し、手持ちヘラケズリが加えられている。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。3は砂岩製の砥石で使用面は二面ある。4、5は敲打具と考えられるもので、先端部に著しい敲打痕が認められる。また、上端近くの両側面には敲打による「抉り」が作られており、本来はこの部分を挟むような形で柄が付いていたものと考えられる。



解No	土 色	土 性 性	備 考
1	10YR5-4: ぶい黄褐色	シルト	
1 b	10YR3-1黑褐色	シルト	地山の角錐(1~3cm)を非常に多く含む
2	10YR3-2黑褐色	シルト	炭化物を非常に多く含む
3	10YR4-4褐色	シルト	地山の角錐(3~5cm)を非常に多く含む
4	10YR3-1黑褐色	シルト	炭化物・礫土・魚骨を多く含む
5	10YR4-3: ぶい黄褐色	シルト	地山の角錐(2~3cm)を多く含む
5 b	10YR3-3褐色	シルト	炭化物・礫土を多量含む(遺物取り上げ5層)
6	10YR2-2黑褐色	シルト	炭化物・礫土を多く含む。上面に貝殻分布
7	10YR3-2黑褐色	シルト	魚骨や土器を非常に多く含む
8	10YR4-4褐色	シルト	地山の角錐(2~3cm)を多く含む
9	10YR5-4: ぶい黄褐色	シルト	地山の角錐(3~5cm)が主体遺物を含まない

第5図 遺物包含層断面図

2. 遺物包含層と出土遺物（第5図）

遺物包含層は南東から入り込む小さな沢地の部分に形成されたもので、包含層の範囲はこの沢地全域に及ぶ可能性がある。なお、今回調査を行ったのはその南東部の一部である。

調査ははじめにサブトレチを設定して、無遺物層に至るまで掘り下げ、その間の層位の把握につとめた。それによれば、トレチ内の層位は合計11枚に分けられること、この中で2・4・5b・6・7層の5枚の層には炭化物・焼土・土器・石器とともに多量の魚骨や獸骨が含まれること、また6層の上面には保存状況の良くない薄い貝層（イタボガキ・オオノガイ・イガイ・スガイを含み厚さは1～2cm）が存在することが確認された。堆積土は周辺の岩盤に起因するもので、岩片が主体をなしシルト質土は少ない。3・5層は地山の角礫を非常に多く含む層で、炭化物や遺物をほとんど含まず、遺物包含層の間層となっている。土器の出土状況は、層中からまんべんなく出土する場合がほとんどで、「面」として捉えられるものはなかった。また、包含層の形成された地点はかなり急峻な谷地であり、廃棄した状況をそのまま反映しているものではないと考えられる。

なお、今回出土した遺物は全体の層位を確認していない段階で取り上げたものが多く、取り上げ層位と断面図の層番号には齟齬のある部分もある。取り上げの層位は、2・6・7層が断面図の層番号と同じ2・6・7層に、3・5層は断面図の層番号と異なりそれぞれ4・5b層に対応する。

出土した土器は、総量が整理箱で約15箱ある。これらの土器はほとんどが撚糸文・斜行繩文・羽状繩文などの地文のみが施されているもので、装飾の加えられたものは非常に少ない。図示したものはこうしたものの中から比較的特徴の表れる口縁部資料や底部資料を中心に選び、体部資料については装飾の加えられているものや特徴的なものを抽出した。

以下、各層から出土した遺物（土器類）について取り上げ層毎に記述を加える。

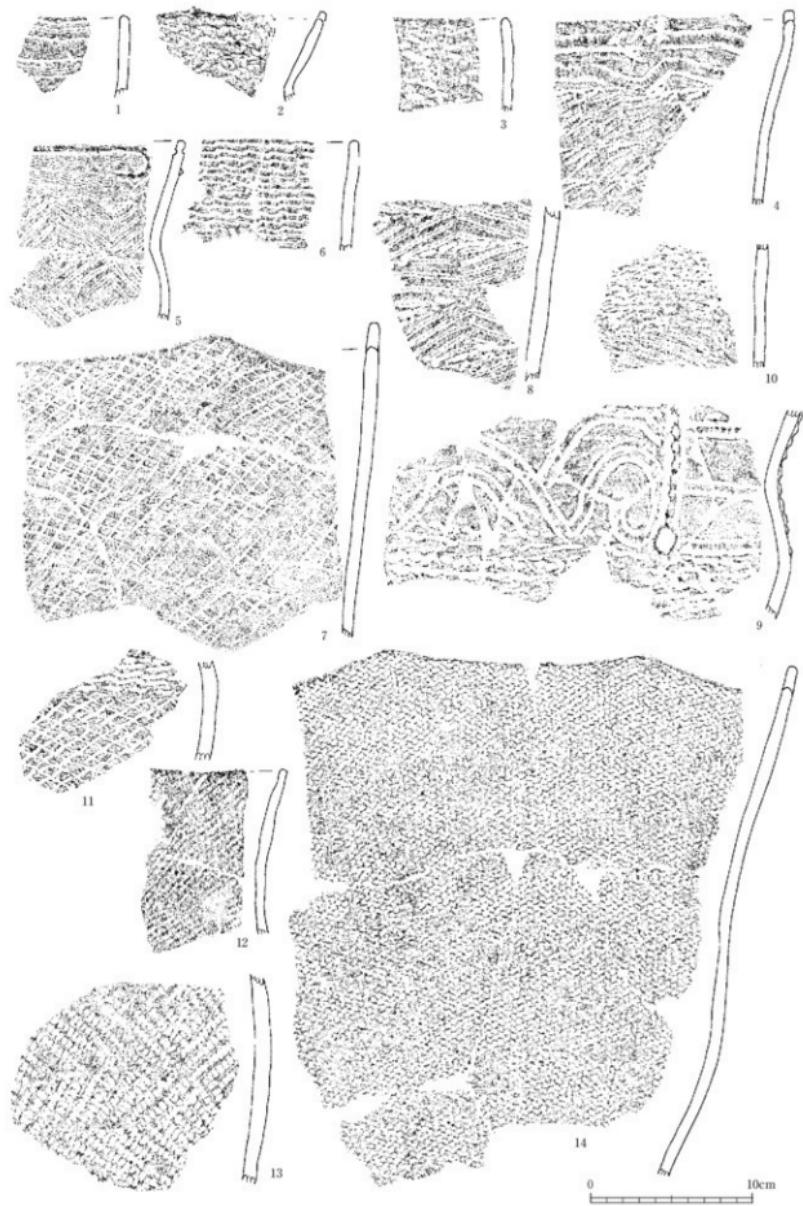
〔1層出土遺物〕（第6図1～3）

1～3は口縁部破片で、1には半截竹管の押し引きによる沈線が横位に、23には葺瓦状撚糸文が施されている。12には小さな突起が付く。

〔2層出土遺物〕（第6図4～14）

11点図示した。地文として撚糸文（5～11）、繩文（4.12.13）、組紐回転文（14）などが施されており、量的に撚糸文が主体を占める。

4は口縁部破片で小さな突起が付く。口縁部に半截竹管の押し引きによる沈線を横位に配し、下位に斜行繩文LRが施されている。5は頸部がすぼまり、口縁部が開く。口縁部に半截竹管による波状の沈線を横位に配し、部分的に「ノ」状の細い粘土紐を貼付している。頸部から体部にかけては二本単位の斜行撚糸文の原体を方向を変えて施文し、菱形のモチーフを構成している。6は平縁で葺瓦状撚糸文が施されている。7は小波状口縁で、網目状撚糸文が施されている。8は体部破片で木目状撚糸文を反転させて施文し、菱形のモチーフを構成している。9は口縁部を欠くが残存部から全体形はキャリバー形を呈すると考えられる。口縁部から頸部にかけては上下に延びる刻みを加えた細い粘土紐により器面を分割し、その間を半



第6図 1層・2層出土遺物

截竹管による沈線で渦巻・弧状などの文様を描いている。体部には葺瓦状撚糸文が施されている。10・11は体部破片で、10は上位に葺瓦状撚糸文、下位に目の詰まった斜行撚糸文が、11は上位に葺瓦状撚糸文、下位に網目状撚糸文が施されている。12は口縁部で小さな突起が付く。斜行繩文LRが施されている。13は体部破片である。結束のない羽状繩文で菱形のモチーフを構成している。14は大波状の口縁で、全面に組紐回転文が施されている。

〔3層出土遺物〕(第7図15~31)

17点図示した。地文として撚糸文(16~25)、繩文(27~30)などが施文されており、量的には撚糸文が主体を占める。

15は口縁部破片で、頸部から口縁部にかけて直線的に外傾している。半截竹管による沈線を横位に施している。16は口縁部で小突起が付く。部分的に細い粘土紐を縦位に貼り付け、その部分には刻目を加えている。地文として口縁直下から横位に木目状撚糸文原体を反転させて施文し、「菱形」のモチーフを構成している。17は平縁で網目状撚糸文が施文されている。18~20は口縁部から体部にかけての破片で口縁部に小さな突起が付く。葺瓦状撚糸文が施されている。21~24はいずれも緩やかな波状の口縁を呈し、21,22は全面に葺瓦状撚糸文が、23,24は斜行撚糸文が施されている。

25は体部で上位に木目状撚糸文が下位に斜行繩文RLが施されている。26は平縁で口縁部に半截竹管による連続刺突がされ、下位には連結結節文が施文されている。

27,28は口縁部破片で、27は小さな波状を呈している。いずれも斜行繩文RLが施されている。

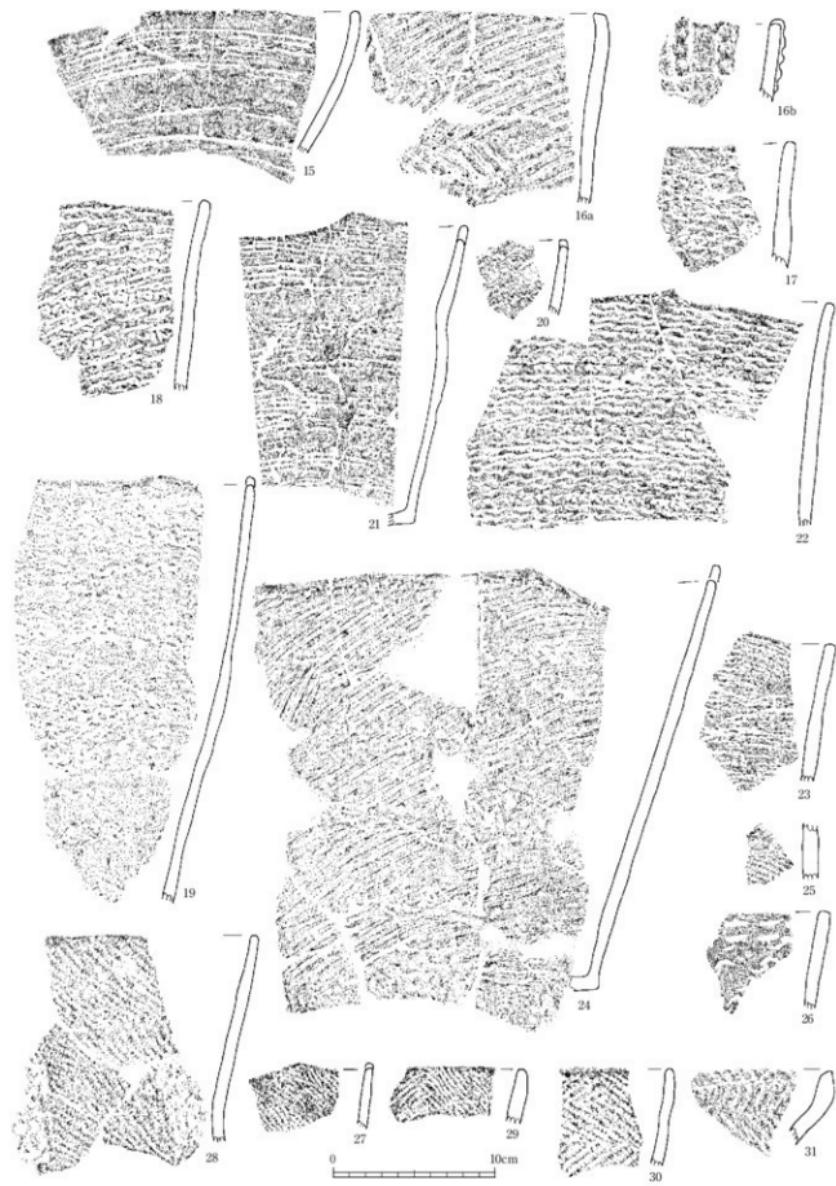
29~31はいずれも結束のない羽状繩文が施文されている。29は縦位に、30では原体を反転させて施文し、「菱形」のモチーフを構成している。31はキャリバー形を呈すると考えられる。

〔5層出土遺物〕(第8・9図32~49)

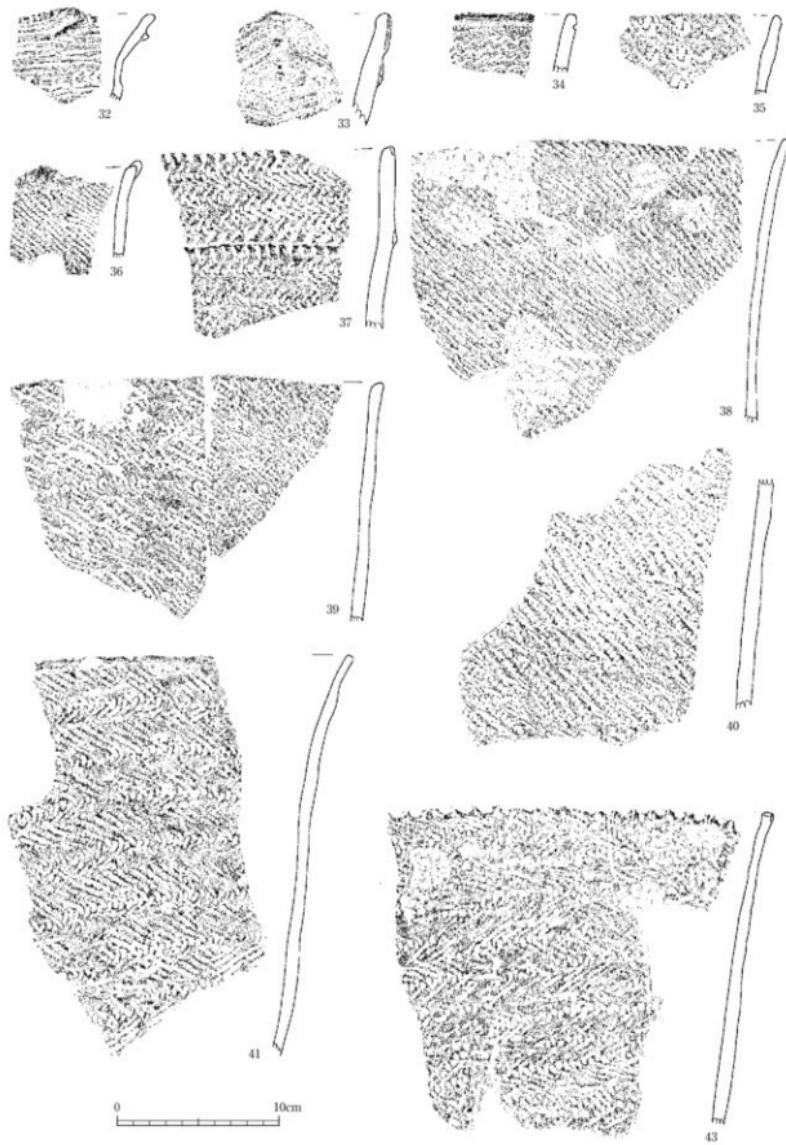
18点図示した。地文として撚糸文(32,33)、繩文(34~49)などが施文されており、量的には圧倒的に繩文が多い。

32は口縁部に小さな突起が付き、そこから体部にかけて「ノ」状の粘土紐が貼付されている。半截竹管の押し引きによる連続刺突文が横位に施されている。33は小波状の口縁で突起の頂部から体部にかけて棒状の粘土紐を貼付し、そこには刻み目を付加している。2本単位の木目状撚糸文の原体を反転させて施文し、「菱形」のモチーフを構成している。34は平縁で口縁部に沿って横位の押正繩文が施文され、その下には単節の繩に無節の紐を多段に結びつけた繩文原体(繩巻撚糸文)により葺瓦状撚糸文風の文様が施されている。35は平縁で、単節繩文RLの原体端部の結び目部分を回転させて施文している。36は口唇部上方から指頭による押さえが連続的に加えられることにより小波状の口縁となっている。口縁部下には斜行繩文RLが施されている。

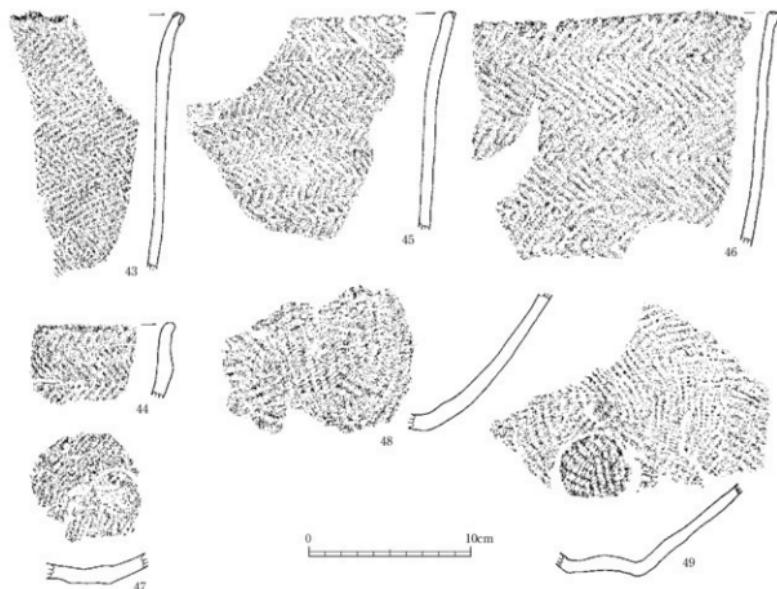
37は口唇部外角に刻目があり、口縁部直下から結束部を強調した短い羽状繩文を施文し、その後細い粘土紐を横位に一条貼付し、上下から刻みを加えている。38,39はいずれも平縁で斜行繩文RLが施され、中でも39は原体端部が強調されている。40は体部破片で付加繩文RL+Lが施文されている。



第7図 3層出土遺物



第8図 5層出土遺物(1)



第9図 5層出土遺物(2)

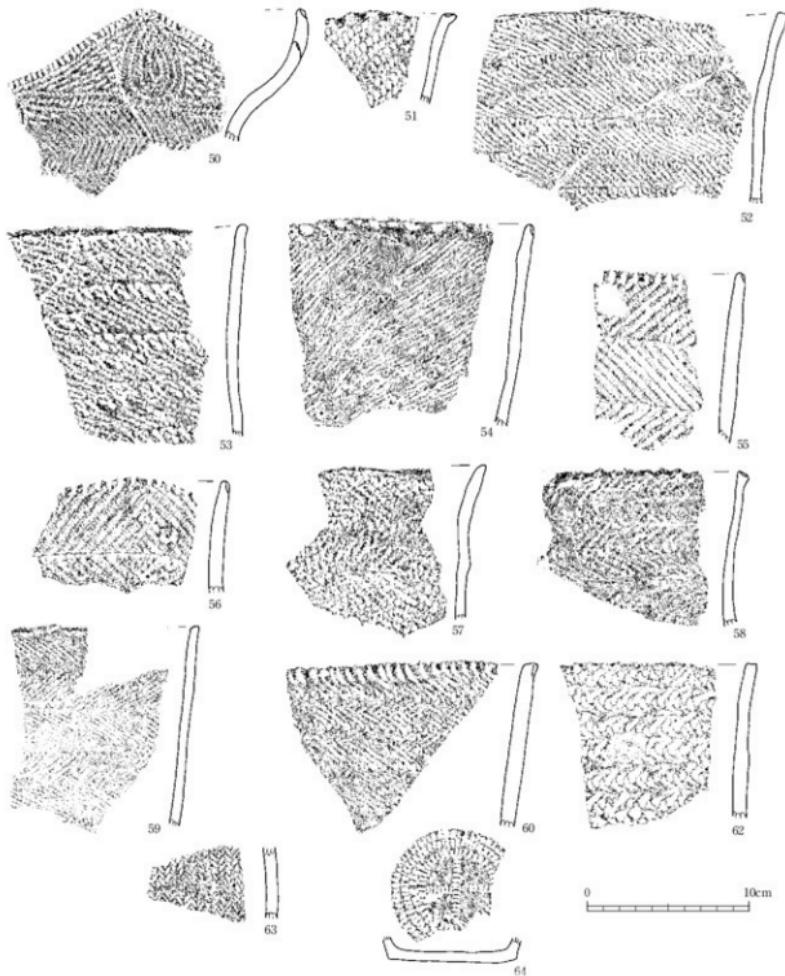
41~43は結束のある羽状縄文が施され、43には口唇部の上方から指頭による押さえが、42には口唇部外角に刻み目が加えられている。44は結束のない、45.46は結束のある羽状縄文で、45.46は撚りの異なる二本の原体端部を細い紐で縛り一本の縄文原体としたものである。45には口唇部外角に小さな刻み目が、46には口唇部上方から刺突が加えられている。47~49は底部資料である。49は小さな平底だが、周囲が稜線状になり上げ底風を呈している。全面に結束のない羽状縄文が施されている。47.48は丸底を呈する。47には斜行縄文LRが49には非結束の羽状縄文が施されている。

[6層出土遺物] (第10・11)[450~64]

15点図示した。地文として縄文(50~62)、組紐回転文(63)などが施文されており、量的には圧倒的に縄文が多い。

50はキャリバー形を呈し、大波状の口縁である。口唇部外角には工具による刻み目が加えられている。撚りの異なる二本単位の押圧縄文で渦巻などの文様を構成し、余白部分は連続刺突で埋めている。くびれの部分から体部にかけては結束のない羽状縄文である。51~54は斜行縄文が施されているもので、51には口唇部の上方から指頭による押さえが、54に口縁部に連続の刺突が加えられている。いずれも斜行縄文であるが51は複節の斜行縄文LRが、52は原体RLの先端(ループ)を強調するように、53は原体RLの端部結び目を強調して、54は無節の斜行縄文Lが施されている。

55~57は結束のない羽状縄文で、55.56には口唇部外角に棒状工具による刻み目が加えられている。56は



第10図 6層出土遺物（1）



第11図 6層出土遺物（2）

口縁部がゆるい波状を呈するものと考えられる。原体の方位を反転させて施文し菱形のモチーフを構成している。

58～62はいずれも結束のある羽状縄文で、62は結束部を強調した短い羽状縄文である。口縁部には58は口唇部の上方から刺突が、60は口縁部直下に爪による刻み目が加えられている。61は大波状口縁で、口縁部は口唇部上方と口縁部上端から交互に押さえられてジグザクになる。

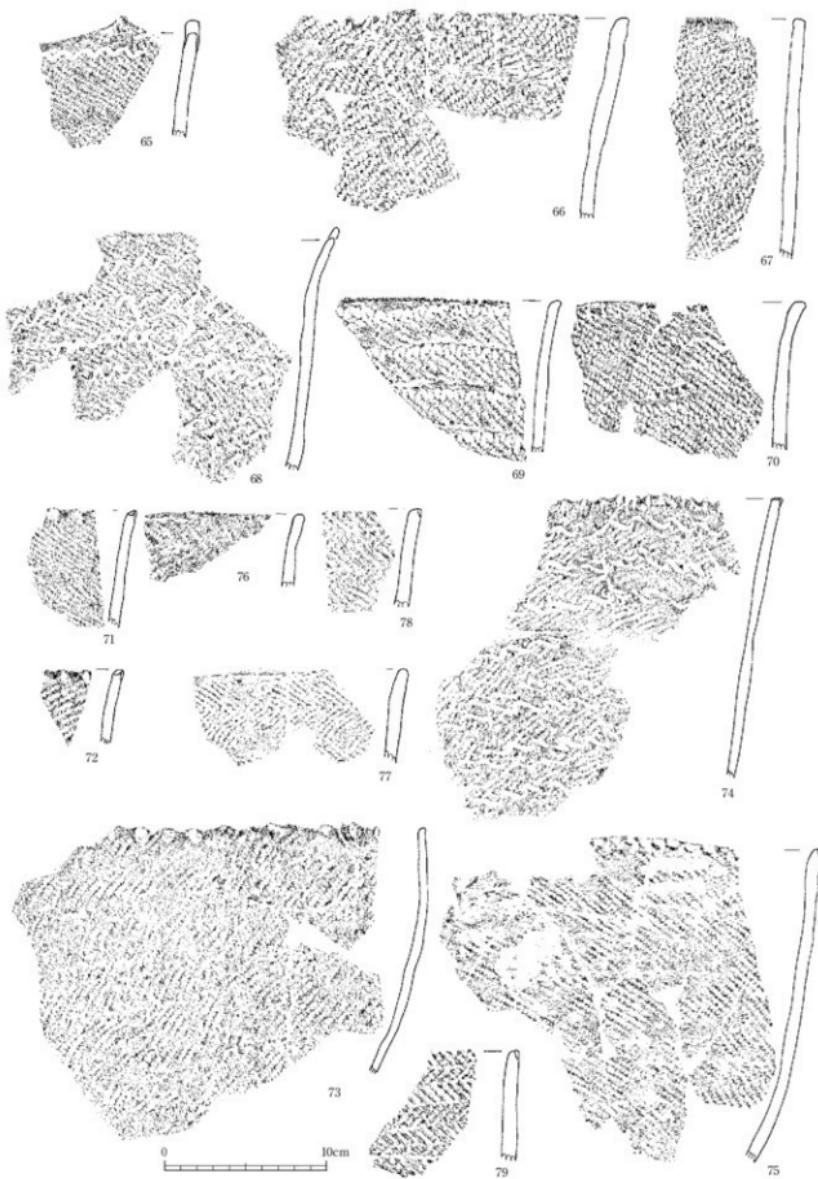
63は体部破片で組紐回転文が施されている。64は底部破片で平底である。底部および体部下端に先端の平たい工具による連続刺突が施されている。

[7層出土遺物] (第12～14図65～102)

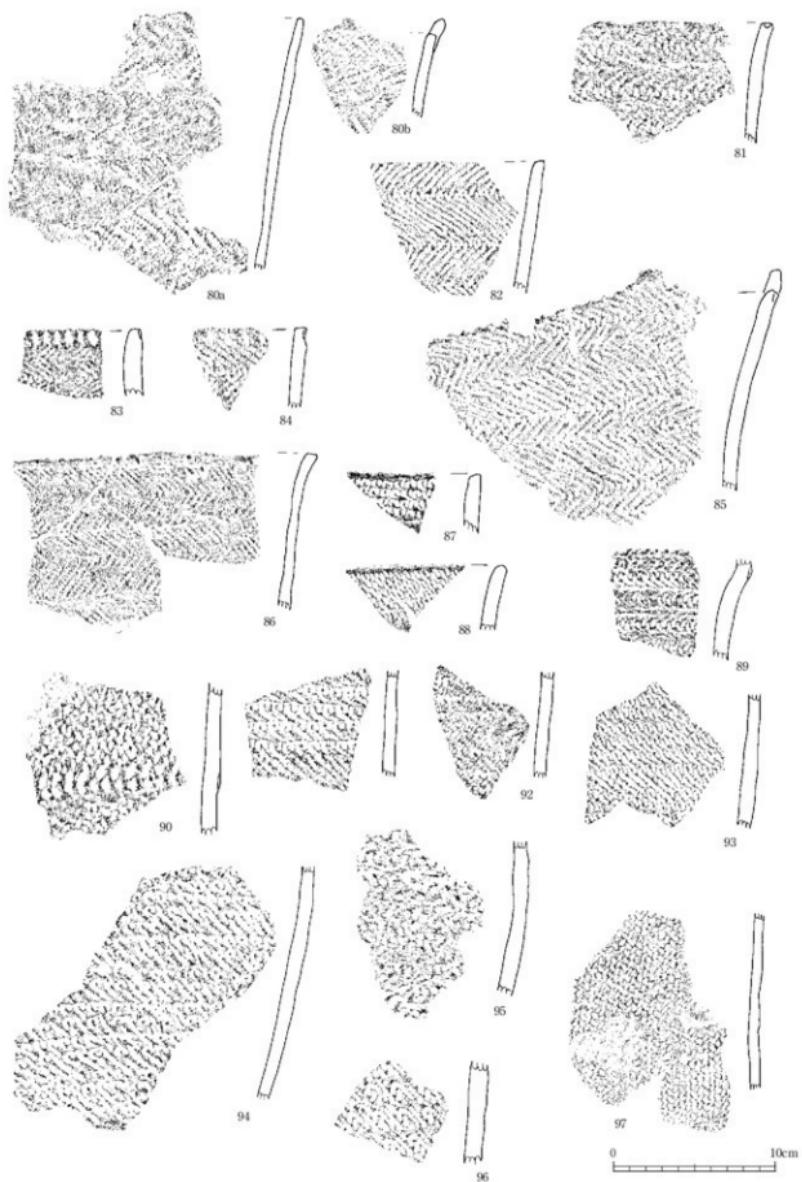
37点図示した。地文として縄文（65～96）、98～102）、組紐回転文（97）などが施文されており、量的には圧倒的に縄文が多い。

65～75は斜行縄文が施されたもので、65.68.74は結節をもつものや原体端部を強調して施文したもの69がある。口縁部の形態には大波状を呈するもの73や、小さな突起が付くもの65.68.、口縁部上端に爪による連続刺突が加えられたもの70、口唇部上方と口縁部上端から交互に押さえられて口唇部外角がジグザクになるもの71.72.74、口唇部外角に爪による刻みが加えられているもの75などがある。

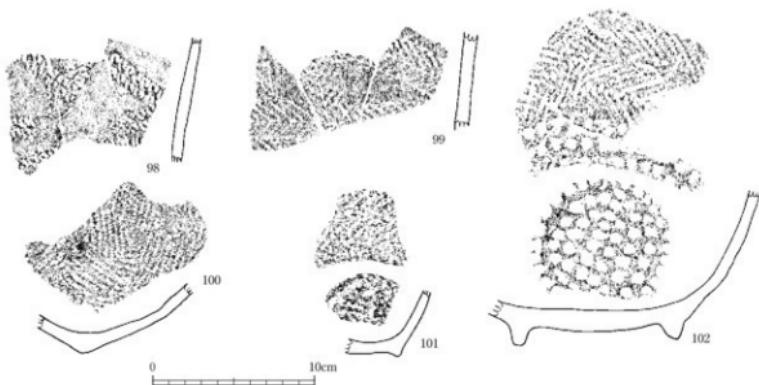
76～86は羽状縄文が施されたもので、77～85は結束のある羽状縄文、86は結束のない羽状縄文で、中でも78.79は撚りの異なる二本の原体端部を細い紐で縛り一本の縄文原体としたものである。（76は不明）また、81は結束部を強調した短い羽状縄文である。口縁部の形態は小さな突起を持つもの80.85があり、85は口唇



第12図 7層出土遺物 (1)



第13図 7層出土遺物（2）



第14図 7層出土遺物（3）

部上方に指頭による押さえが加えられジクザクになっている。他は平縁で、81には口唇部に連続刺突が、8384には口縁上端に爪による刺突が加えられている。

8788は口縁部の小破片である。平縁でループ文が施されている。

89~99は体部破片である。8990は結東部を強調した短い羽状縄文89や組紐回転文90を施文した後に細い粘土紐を横位に貼付し、その部分に上下から刺突を加えたものである。91~9498はループ文の施されたもので、90は下位に斜行縄文RLが加えられている。98ではループ文により山形のモチーフが描かれている。95は結東部を強調した短い羽状縄文、96は縄文原体の端部を結びその部分だけを回転施文したものである。97は組紐回転文が施文されたものである。99は体部破片で、撚りの異なる二本の原体端部を細い紐で縛り一本の縄文原体としたものを方向を変えて施文し文様を構成している。100~102は底部破片で、100は尖底、101は底部の外縁が張り出して上げ底風を呈している。102は高台を付けて上げ底としたもので、体部には結束のある羽状縄文が底部・台部・体部下端は列点刺突が加えられている。

〔1~5層出土遺物〕(図版7・8 103~134)

32点図示した。層位の帰属については特定できなかったものの貝層（6層）よりも上位から出土したものである。

103は口縁部破片である。あらい撚糸文を内外両面に施した後に、外面には細い粘土紐を縦位に貼付している。104は口唇部に刻みをもつ。横位と斜位の押圧縄文が施されている。105は唇部上方と口縁部上端から交互に押さえられて口唇部外角はジクザクになる。外面に縦位の貝殻条痕文が施されている。106は体部破片で外面にのみ横位及び斜位の貝殻条痕文が施されている。107は底部の小片である。尖底で連続刺突文がみられる。108は平縁で半截竹管の先端部分の押し引きによる連続刺突が施されている。

109~113は撚糸文を地文とするもので、いずれも葺瓦状撚糸文である。113は口縁部に葺瓦状撚糸文を施文しそれ以下には斜行縄文RLを施している。また、112は撚糸文の下に斜行縄文があり、縄文原体（RL）を軸として巻き付けたものと考えられる。口縁部の形態は109が大きな波状を、113は緩い波状を呈してい

る。114～116は横方向に展開する半截竹管による沈線や半截竹管の小口面の押し引き文によるもので、116は斜格子のモチーフを描いている。117.118はループ文の施されたもので、118には口縁端部に爪による連続刺突が加えられている。119は口縁部に棒状工具による刻み目が加えられ、その下に押圧繩文と円形竹管文による文様が展開している。文様の隙間の部分は矢羽状の短い沈線で埋められている。

120～124は斜行繩文を地文とするもので、121.123は結節をもつ、122は結束のある斜行繩文である。口縁部の形態は、120は口唇部外角に工具による刻み目が、121.122には小さな波状の突起が付く。123はいわゆる石炭バケツ形を呈するもので正面と側面では異なる形の突起が付く。124は4単位の大波状口縁で、さらに口唇部外角に刻み目が加えられている。底部付近まで残存しており、丸底を呈するものと考えられる。

125～133は羽状繩文を地文とする。125は小さな波状の突起をもちそこから体部にかけて「ノ字」状の粘土紐を貼付し、結束のない羽状繩文を縦位に施文している。126～133はいずれも結束のある羽状繩文で127.128は撚りの異なる二本の原体端部を細い紐で轉り一本の原体としたものである。

また、羽状繩文の施文部よりも上位に半截竹管により沈線が加えられたもの127、上下を転位させて施文し菱形のモチーフを作り出したもの126.133がある。口縁部の形態は小さな波状の突起をもつものの125.128や口唇部上方と口縁部上端から交互に押さえられて口唇部外角はジクザクになるもの132がある。134は組紐回転文が施されている。

〔6、7層出土遺物〕(図版9～11 135～155)

30点図示した。層位の帰属については特定できなかったものであるが、貝層（6層）よりも下位から出土したものである。

135は首のすばまたの深鉢で全体に目の粗い撚糸文が施文されている。施文の方向は口縁部が横位、頸部は縦位、さらに体部は横位である。136～146.150は斜行繩文の施されたもので、原体端部を強調するよう施文されたもの137.139.150や結束があるもの141、結節をもつもの142.143.146などがある。口縁部の形態には、小さな突起をもつものの140、口唇部外角に指頭による刻み目が加えられているもの137.138.142.144、口唇部上方と口縁部上端から交互に押さえられて口唇部外角がジクザクになるもの142がある。

147～149は羽状繩文の施されたものでいずれも結束がある。この中で147は撚りの異なる二本の原体端部を細い紐で轉り一本の繩文原体としたもの149、結束の部分を強調して施文した短い羽状繩文である。口縁部の形態は、147は口唇部上部に繩文原体による刻み目が、148は口縁部に爪による刺突が加えられている。151はループ文の施されたものである。150は口唇部上方と口縁部上端から交互に押さえられて口唇部外角がジクザクになっている。

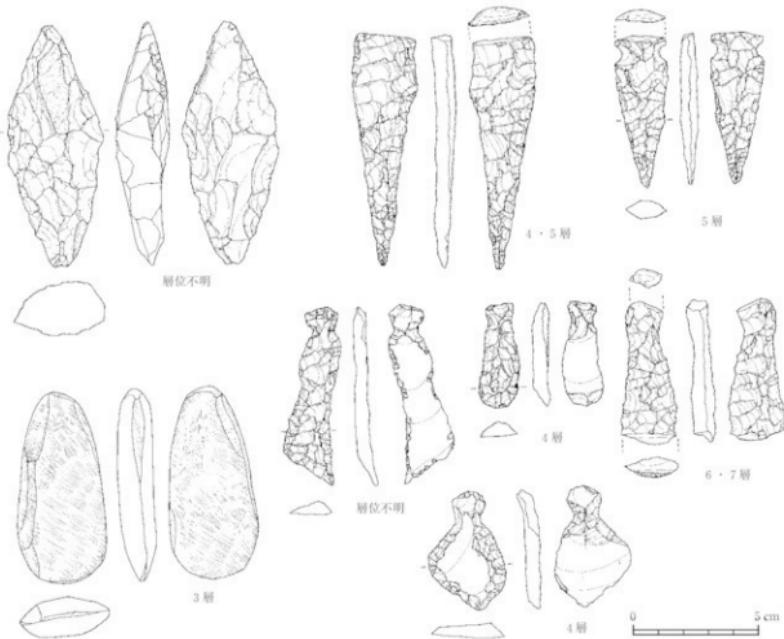
152は結束のある羽状繩文を施文後に連続刺突が加えられている。153は口唇部外角に列点刺突を施し、口縁部には横位の押圧繩文と列点刺突を交互に数段加え文様を描き、下位に繩文を施している。154.155は底部破片でいずれも平底である。154は結束のある羽状繩文が、155は斜行繩文RLが施文されている。また155には網代痕がみられる。

〔遺構確認面出土遺物〕(図版11 156～172)

表土及び層位不明の出土遺物である。文様などで特徴的なものを抽出しており、全資料を代表するものではない。

156～162は葺瓦状撚糸文が施文されたもので、156.157には連続刺突が加えられている。施文原体の中で158.162は縄文原体を軸とした巻いたものである。

163は網目状撚糸文が、165は口縁部を細い粘土紐を貼付して、その部分とさらにその直下に一段連続刺突を加えて、下位に連結結節沈文を施している。165は体部破片で、紐回転文が施文されている。166は羽状縄文と葺瓦状撚糸文が施されたもので、それぞれの文様が交互に施文されている。167以下は縄文の施されたもので、169は結束のある羽状縄文で菱形のモチーフを描いている。170は原体の末端を結びその部分を転がして施文している。168.170～172は口唇部外角に刻み目が加えられている。



第15図 包含層出土石器

〔自然遺物〕(図版12)

自然遺物は2・4・6・7層から多く出土しており、その中でも6層からは貝殻の他に非常に多くの魚骨や獸骨が出土している。今回の調査では6層と7層から土層のサンプリングを行い、その中に含まれる動物遺体について同定を行った。サンプルの量は6層が18.5リットル、7層が8.5リットルである。なお、定量分析については行っていない。

6層からは貝類はとしてはイタボガキ、オオノガイ、イガイ、スガイ、ツメタガイ、アカニシが、魚類としては多量のマグロ属の椎骨、メバル属（クロソイに似る）の椎骨、カワハギ類の椎骨、サメ・エイ目の椎骨、マダイの前上顎骨やタイ類の椎骨、サバ属の椎骨、カツオの椎骨が、鳥類はウの上腕骨が、獸骨にはイノシシの中節骨、鹿の下顎歯が出土している。

7層からは魚類としては多量のマグロ属の椎骨、タイ類の椎骨、サバ属の椎骨、カツオの椎骨、アイナメの方骨が、獸骨としてはウサギの上腕骨が出土している。

V. 考察

1) 壺穴住居跡の年代

壺穴住居跡から出土した遺物には図示したものの他に土師器壺・甕、須恵器壺・壺などがある。この中で土師器は小片を含めてもすべて製作に際してロクロを使用したもので、大きく表杉ノ入式（氏家:1957）に位置付けられる。表杉ノ入式については器形や器面調整などの特徴から多くの細分が試みられ、さらに併存する須恵器から年代観も明らかにされつつある。今回出土した土師器壺は比較的深みのある器形で、ロクロ成形後に手持ちヘラケズリの再調整が施されるなど表杉ノ入式としては古い段階の特徴をもつものである。遺物の量が少なく断定できるものではないが、概ね9世紀の前半頃の所産であり、壺穴住居跡の年代もこの頃と考えられる。

2) 遺物包含層出土土器について

○土器の分類と層位の対応

包含層出土土器を概観すると、すべての土器は胎土中に纖維を混入していること、器形が推定できるものについてはいずれも深鉢を基本としたものであり、文様もほとんどが地文のみで構成され文様帶をもつものや加飾が施されているものはわずかであるなどの特徴があげられる。こうしたことからここでは地文や、装飾があるものについては装飾の手法、口縁部の形態的特徴などから分類を試みる。

地文には撲糸文系（A類）、純文系（B類）、その他（C類）があり、A類には斜行撲糸文（I）、葺瓦状撲糸文（II）、木目状撲糸文（III）、網目状撲糸文（IV）が、B類には斜行純文（V）、羽状純文（VI）、ループ文（VII）、付加純文（VIII）、紐組回転文（IX）、端部の結節回転文（X）があり、斜行純文と羽状純文にはそれぞれ結束（撲りの異なる二本の原体端部を細い紐で縛り一本の純文原体としたものを含む）のあるもの（+）と結束のないもの（-）、さらに斜行純文には結節をもつもの（++）がある。

加飾方法としては、半截竹管文による沈線が施されるもの（a）、半截竹管文による刺突が施されるもの（b）押圧純文が加えられているもの（c）、その他の文様が加えられているもの（d）がある。

口縁部の形態は、平縁で口唇部に刻み目のないもの（1）、平縁で口唇部に刻み目や刺突をもつもの（2）、波状で口唇部に刻み目のないもの（3）、波状で口唇部に刻み目や刺突をもつもの（4）がある。

こうした特徴をもとに分類したのが（表1）である。

分類された土器について層毎の帰属を見ると、2・3層出土の土器はA類の撚糸文系が主体を占めるのに対して、5・6・7層のものはB類の繩文系が圧倒的に多く二者間には大きな相違点が見られる。さらに2・3層は、いずれの層も葺瓦状撚糸文が多用されている、口縁部は波状を呈するものや小突起をもつものが多く、それらには刻み目等は加えられないなどの共通点があり、両者間には大きな相違点は見られない。一方、5・6・7層出土土器を比較すると、地文となる斜行繩文と羽状繩文の構成比は5・6層に比べ7層では斜行繩文の割合が若干高くなっている。口縁部の形態に付いてみると、口縁部が小さな突起をもつか波状を呈するものが6・7層と比べて5層では少ない。また、口縁部上端から口唇部にかけて何らかの刻み目をもつものは6・7層と比べて5層では少ない。

このように地文や口縁部の形態には5層出土のものと7層出土のものとには差異が見られる。しかし、5～7層から出土した土器をみると個々の要素については層毎に漸移的に変化しており大きな時間差は考えられない。このことからこれらの土器については一括して扱うこととし、層位を明確に分離できなかった6～7層出土遺物についても同様とのものとする。

また、包含層の堆積状況から2・3層と5・6・7層の間にはほとんど遺物を含まない間層を挟むことから両者間には大きな隔たりがみられる。こうしたことから、2・3層から出土した土器と5・6・7層から出土した土器をそれぞれ一括して扱い前者を第1群土器、後者を第2群土器とする。

○第1群土器について

胎土に纖維を含み、器形が判明するものはすべて深鉢で、頸部にくびれを持ち、口縁部が外反気味になるものと直線的に外傾するものとがある。底部はすべて平底である。

撚糸文を主体とした地文で、その中には斜行撚糸文・葺瓦状撚糸文・木目状撚糸文・網目状撚糸文がある。頸部から口縁部にかけて文様帶をもつものが若干あり、装飾の手法としては半截竹管による沈線文や連続刺突や隆線文がある。また、全体的なモチーフは不明であるが、半截竹管による沈線文や連続刺突のみで施文されているものも若干みられる。口縁部は大きな波状を呈するものが多く口唇部や口縁端部には刻み目が施されないなどが特徴としてあげられる。

こうした特徴をもつ土器としては仙台市三神峰遺跡第I層土器（白鳥:1974）名取市今熊野遺跡第2土器群（宮教委:1986）、蔵王町欠・持長寺遺跡2～6群土器（宮教委:1981）、鳴瀬町平田原貝塚第一群土器（塙釜女子高:1969）が知られておりいずれも大木2a式に比定されている。

第1群土器もこれらと同様の特徴をもつものであり、大木2a式の所産と考えられる。

○第2群土器について

すべての胎土中に纖維を多量に含み、器形はすべて深鉢を基調とするものであるが、体部上半が若干すぼまりくびれをもち口縁部にかけて外傾するものや体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの、石炭バケツ形を呈するものもある。底部は尖底・丸底・平底があり、後者には周縁が高く上げ底風を呈するものもある。いずれも全体に繩文や連続刺突が施文されている。

文様は基本的には斜行繩文あるいは羽状繩文を地文とし、ほとんどの土器が地文のみで文様帶や装飾を持たない。上位がループ文で下位に斜行繩文のものや羽状繩文やループ文で山形のモチーフを作

第1表 出土土器観察表

No.	地点	層位	分類	No.	地点	層位	分類	No.	地点	層位	分類	No.	地点	層位	分類
1	B10	1	Ca1	44	Dトレ	5	BVI-1	87	Dトレ	7	BVI1	130	D10	2・3	BVI+1
2	B10	1	AII3	45	Dトレ	5	BVI+2	88	Dトレ	7	BVI1	131	Bトレ	1~5	BVI+1
3	B11	1	AII1	46	Dトレ	5	BVI+2	89	Bトレ	7	BVI+d	132	Dトレ	1~5	BVI+2
4	AII	2	BV++a3	47	Dトレ	5		90	Dトレ	7	BIXd	133	Bトレ	1~5	BVI+1
5	B11	2	A I a1	48	Dトレ	5		91	Aトレ	7	BVI II	134	Bトレ	1~5	BIX
6	AII	2	AII1	49	Dトレ	5		92	Dトレ	7	BVIII	135	Aトレ	6・7	A II
7	AII	2	AN3	50	Dトレ	6	BVI-c4	93	Dトレ	7	BVIII	136	Dトレ	6・7	BV-1
8	B11	2	A III	51	Cトレ	6	BV-2	94	Aトレ	7	BVIII	137	Bトレ	6・7	BV-1
9	AII	2	AIIa	52	Dトレ	6	BV-1	95	Dトレ	7	BVI+	138	Cトレ	6・7	BV-2
10	B11	2	AII3	53	Cトレ	6	BV-1	96	Cトレ	7	BX	139	Bトレ	6・7	BV-2
11	B11	2	A II N	54	Dトレ	6	BV-2	97	Cトレ	7	BIX	140	Aトレ	6・7	BV-3
12	AII	2	BV-1	55	Dトレ	6	BVI-2	98	Dトレ	7	BVIII	141	Bトレ	6・7	BV+1
13	B11	2	BVI+	56	Cトレ	6	BVI-4	99	Dトレ	7	BVI+	142	Dトレ	6・7	BV++2
14	B11	2	BIX3	57	Cトレ	6	BVI-2	100	Bトレ	7	BV-	143	Bトレ	6・7	BV++2
15	D10	3	Ca1	58	Cトレ	6	BVI+2	101	Cトレ	7	BV-	144	Bトレ	6・7	BV-1
16	Aトレ	3	A III3	59	Cトレ	6	BVI+1	102	Cトレ	7	BVI+	145	Cトレ	6・7	BV-2
17	AII	3	AN1	60	Dトレ	6	BVI+2	103	Dトレ	1~5	Ald1	146	Bトレ	6・7	BV++1
18	AII	3	AII3	61	Cトレ	6	BVI+4	104	Bトレ	1~5	Ce1	147	Dトレ	6・7	BVI+2
19	B10	3	AII3	62	Dトレ	6	BVI+1	105	Dトレ	1~5	Cd2	148	Cトレ	6・7	BVI+2
20	AII	3	AII3	63	Cトレ	6	BX	106	Dトレ	1~5	C	149	Dトレ	6・7	BVI+1
21	AII	3	AII3	64	Cトレ	6		107	Dトレ	1~5	Cd	150	Bトレ	6・7	BV-2
22	B10	3	AII3	65	Dトレ	7	BV++3	108	Dトレ	1~5	Cd1	151	Aトレ	6・7	BVII
23	D10	3	A I 3	66	Dトレ	7	BV-1	109	Bトレ	1~4	A II 3	152	Aトレ	6・7	BVI+b
24	B10	3	A I 3	67	Dトレ	7	BV-1	110	Bトレ	1~4	A II 3	153	Cトレ	6・7	BVe
25	AII	3	B III	68	Cトレ	7	BV++3	111	Aトレ	1~3	A II 1	154	Bトレ	6・7	BV
26	AII	3	Ab	69	Aトレ	7	BV-1	112	B11	3・4	Cd1	155	Dトレ	6・7	
27	B10	5	BV3	70	Bトレ	7	BV-2	113	B	1~4	B II V-2	156	不明	不明	A II b2
28	B10	5	BV-1	71	Cトレ	7	BV-2	114	B	1~5	Ca1	157	不明	不明	A II b
29	AII	5	BVI+1	72	Cトレ	7	BV-2	115	B11	3・4	Ca	158	不明	不明	A II 3
30	B10	5	BVI-1	73	Aトレ	7	BV-4	116	A	1~3	Ca	159	不明	不明	A II 3
31	AII	5	BVI+1	74	Cトレ	7	BV++2	117	B	1~5	BVIII	160	不明	不明	A II 3
32	Bトレ	5	Ca3	75	Aトレ	7	BV-2	118	B	1~5	BVIII	161	不明	不明	A II 1
33	Bトレ	5	A III3	76	Cトレ	7	BVI-1	119	B	1~5	c2	162	不明	不明	A II
34	Bトレ	5	BVI+1	77	Bトレ	7	BVI+1	120	D	1~5	BV2	163	不明	不明	AV3
35	Dトレ	5	BX1	78	Dトレ	7	BVI+2	121	B	1~4	BV++3	164	不明	不明	
36	Dトレ	5	BV-2	79	Aトレ	7	BVI+2	122	D	1~5	BV+3	165	不明	不明	BIX?
37	Dトレ	5	BVI+d1	80	Cトレ	7	BVI+3	123	B	1~4	BV++3	166	不明	不明	BV2
38	Bトレ	5	BV-1	81	Dトレ	7	BVI+2	124	D	1~5	BV+4	167	不明	不明	BV-3
39	Bトレ	5	BV-1	82	Cトレ	7	BVI+1	125	B	1~5	BVI-2	168	不明	不明	BV-2
40	Dトレ	5	BⅢ	83	Aトレ	7	BVI+2	126	B	1~5	BVI+1	169	不明	不明	BVI+1
41	Dトレ	5	BVI+1	84	Cトレ	7	BVI+2	127	D	1~5	BVI+a	170	不明	不明	BX2
42	Dトレ	5	BVI+2	85	Dトレ	7	BVI+4	128	D	1~5	BVI+3	171	不明	不明	BV++2
43	Dトレ	5	BVI+2	86	Dトレ	7	BVI-1	129	D10	2・3	BVI+1	172	不明	不明	BVI+2

り出したもの、押圧縄文や単沈線や刺突をえたものなどが若干みられる。

羽状縄文には結束と非結束のものがあり、全体的7割程度が結束されたものである。

口縁部は平縁の他に、波状を呈するもの、突起を有するものが多い。一方、口唇や口縁部上端に指頭による摘み出しや爪や棒状工具による刺突、押圧縄文などにより何らかの「刻み目」が加えられるものが多くみられる。

こうした土器群に類似するものとしては鳴瀬町金山貝塚包含層出土土器（鳴瀬教委:1977）、七ヶ浜町左道貝塚出土土器（後藤:2005）、柴田町上川名貝塚上層土器（加藤:1951）、名取市宇賀崎貝塚下層土器（宮教委:1980）、角田市土浮貝塚上層土器（角田教委:1994）などがあげられ縄文時代前期初頭の「上川名II式」（加藤:1951）に位置付けられている。この時期の土器群については林謙作や白鳥良一、相原淳一、早瀬亮介らによって詳細な検討が加えられ細分が試みられた。相原は「上川名式」と呼ばれる土器群の中に5つのグループが存在すること（相原:1990）、早瀬は土浮貝塚の調査をもとに器種構成や器形、口縁端部の形状や口縁部の形態、文様帶の構成要素、地文となる縄文の組成などから新旧二段階の変遷を指摘している（早瀬:2005）。一方、「上川名II式」に続く大木1式は、押圧縄文などの装飾をもたずほとんど地文のみで構成され、口縁部に刻み目をもたない、平底を呈するなどの特徴を持つとされおり、第2群土器とは大きく異なる。

本遺跡のものはこれに先行すると考えられ、上記の土器群と同様に「上川名II式」の所産と考えられる。

VIIまとめ

今回の調査では平安時代の堅穴住居跡2棟と縄文時代前期の遺物包含層が検出された。

遺物包含層は今回調査した地点から北西側への延びが認められており、その範囲は遺跡南東部の谷地全城に及ぶものと考えられる。

包含層の時期は大きく二時期あり、上川名II式の比較的新しい段階のものと大木2a式期のものである。出土遺物には土器・石器などの人工遺物の他、マグロをはじめとする魚骨や獸骨などの自然遺跡が多量に出土している。

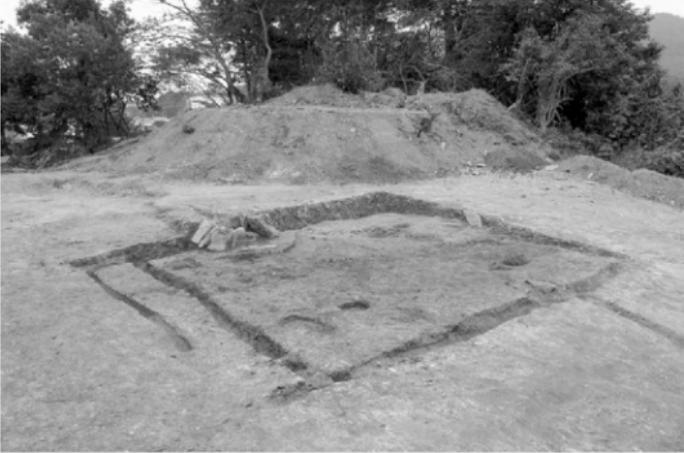
なお、今回の調査はサブトレンチで包含層の層序を確認にしたのみで、全体の掘り下げは行っていない。

引用・参考文献

- | | | | |
|-----------|-------|-----------------------------------|-----------|
| 相原 淳一 | :1990 | 「東北地方における縄文時代早期後半から前期前葉にかけての土器編年」 | 考古学雑誌76-1 |
| 女川町教育委員会 | :1993 | 「尾田峰貝塚」女川町文化財調査報告書第1集 | |
| 女川町誌編纂委員会 | :1991 | 「女川町誌編」 | |
| 角田市教育委員会 | :1994 | 「土浮貝塚」角田市文化財調査報告書第13集 | |
| 加藤 孝 | :1951 | 「宮城県上川名貝塚の研究」宮城学院研究論文集1 | |
| 後藤 勝彦 | :2005 | 「宮城県宮城郡七ヶ浜町左道貝塚の調査」宮城考古学第7号 | |

- 塙釜女子高校社会部 : 1969 「平田原貝塚」
- 白鳥 真一 : 1974 「仙台市三神峰遺跡の調査」東北の考古・歴史論集
- 東北歴史資料館 : 1989 「宮城の貝塚」東北歴史資料館資料集25
- 鳴瀬町教育委員会 : 1977 「金山貝塚発掘調査概報」鳴瀬町文化財調査報告書第1集
- 秦昭 繁 : 1977 「松原」置賜考古学会米沢
- 早瀬 亮介 : 2005 「阿武隈川下流域における縄文時代前期初頭の土器型式」歴史第104輯
- 宮城県教育委員会 : 1980 「宇賀崎貝塚」宮城県文化財調査報告書第67集
- 宮城県教育委員会 : 2005 「大石原遺跡」宮城県文化財調査報告書第202集
- 宮城県教育委員会 : 1981 「久・持長寺遺跡」宮城県文化財調査報告書第79集
- 宮城県教育委員会 : 1996 「町田遺跡」宮城県文化財調査報告書第169集
- 宮城県教育委員会 : 1986 「今熊野遺跡」宮城県文化財調査報告書第114集
- 山内 清男 : 1979 「日本先史土器の縄紋」先史考古学会

S I -01堅穴住居跡
(北西から)



同 カマド

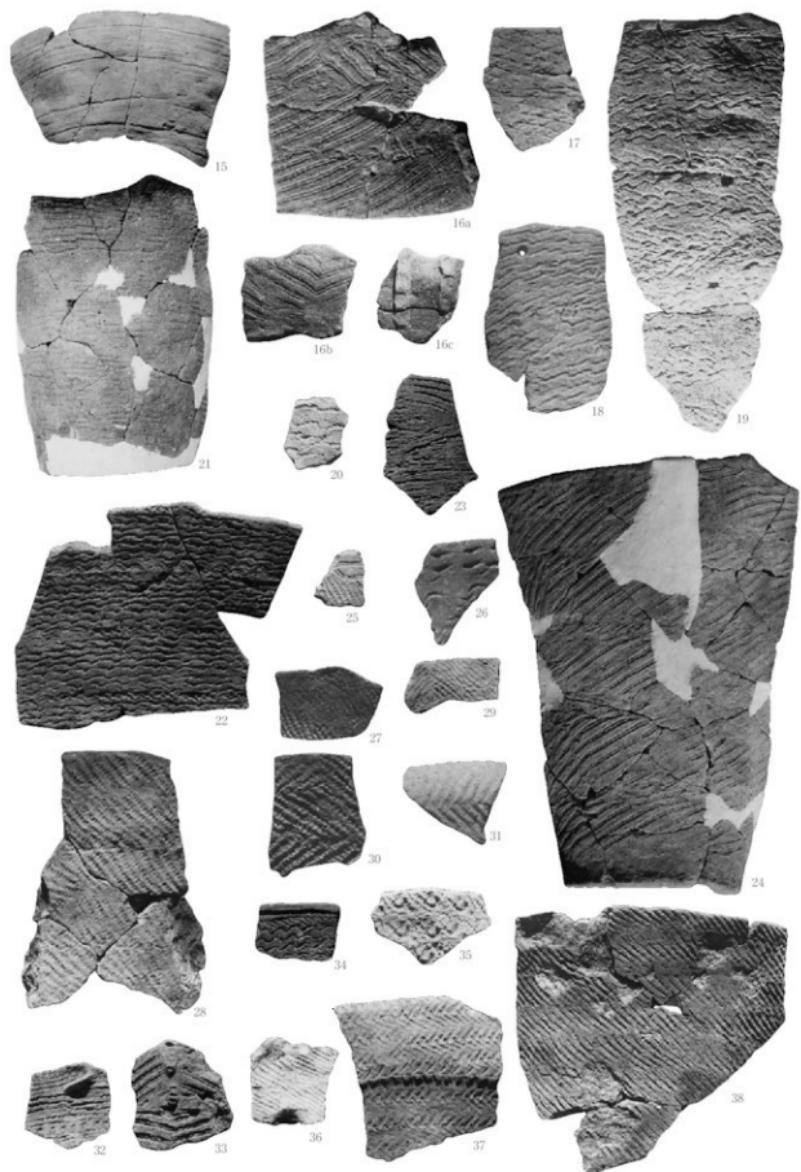


東調査区

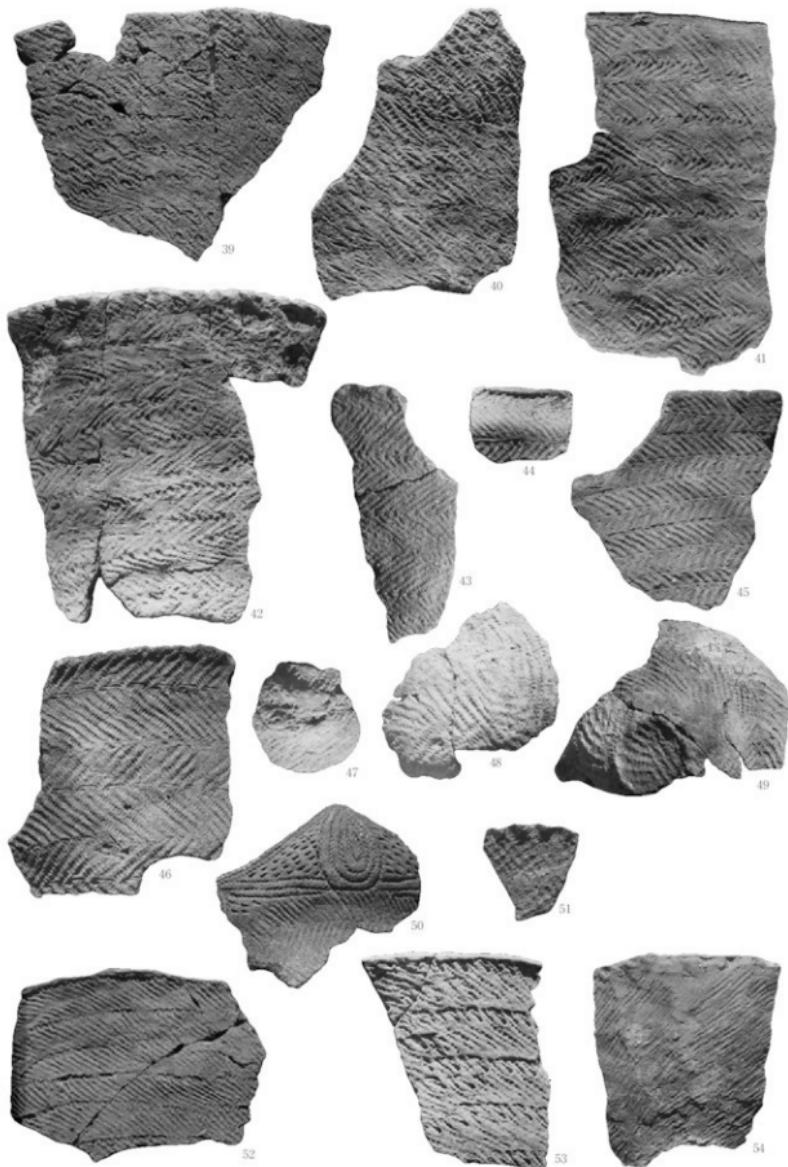




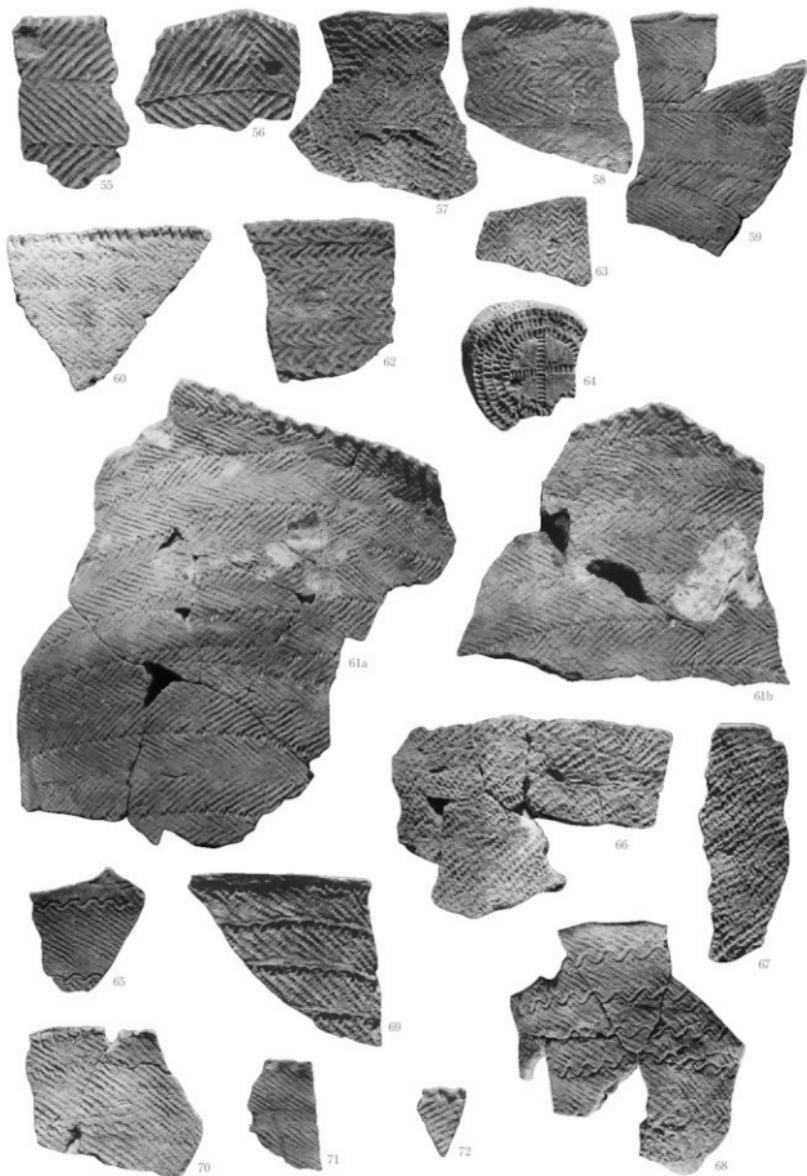
図版2 1層・2層出土遺物



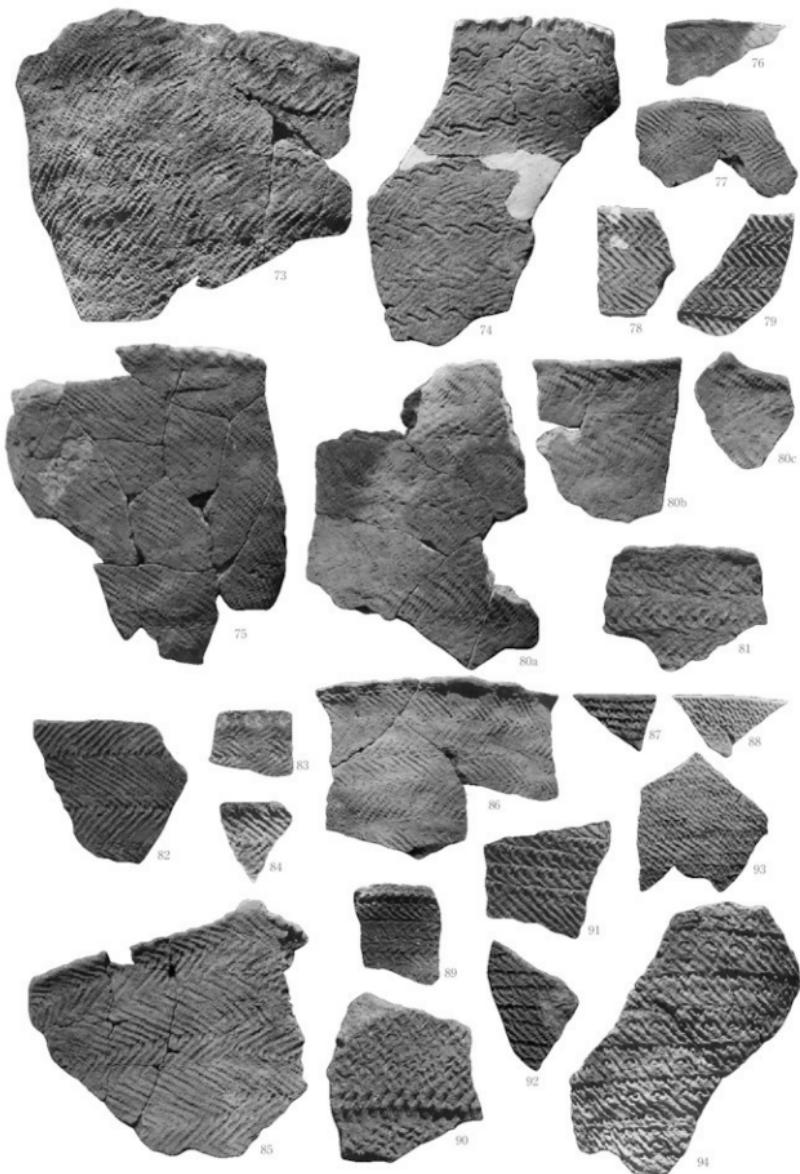
図版3 3層・5層出土遺物



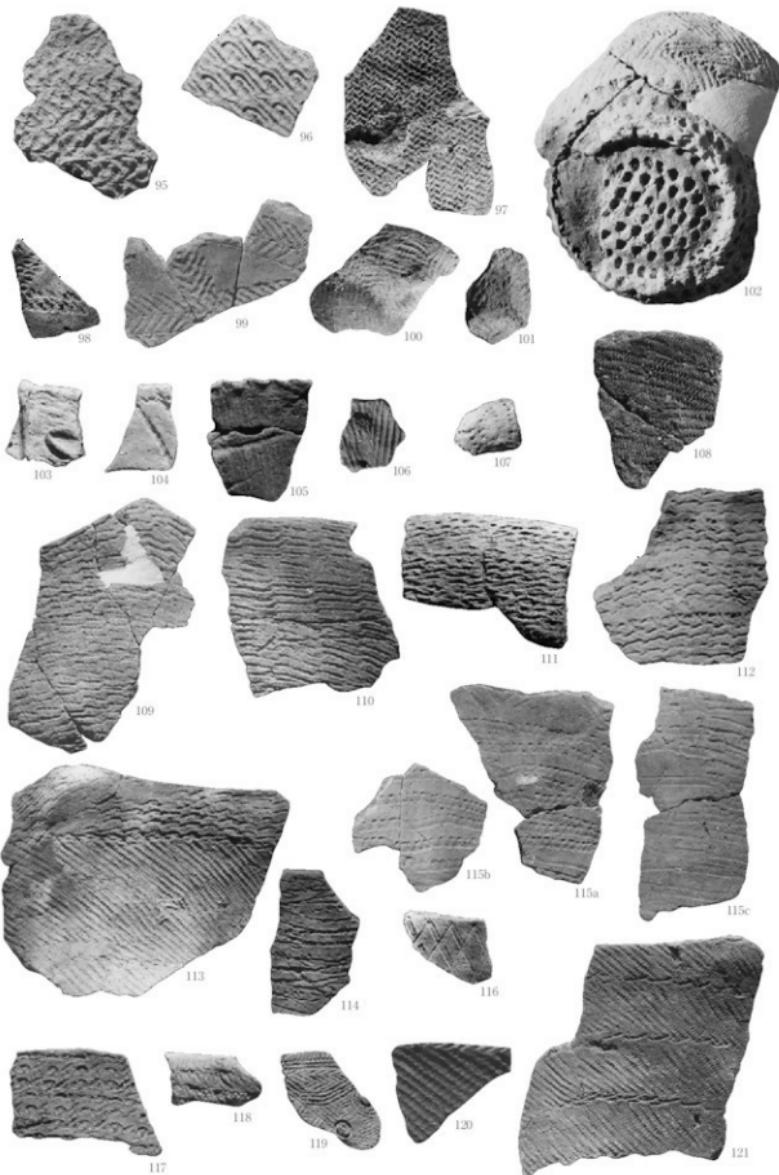
図版 4 5層・6層出土遺物



図版5 6層・7層出土遺物



図版 6 7 層出土遺物



図版7 7層・1~5層出土遺物



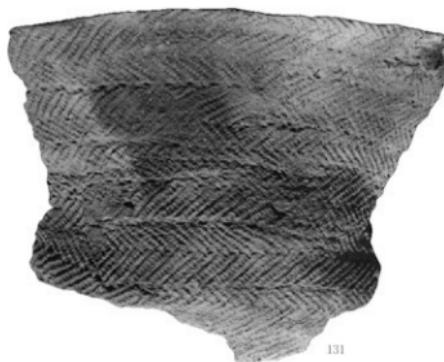
図版 8 1～5 層出土遺物



129



130



131



133a



132



133b



134

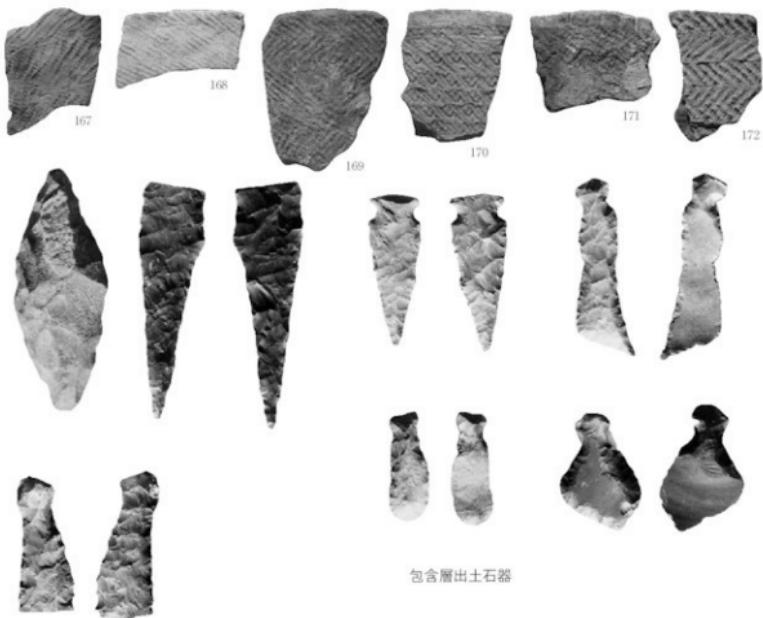


135

図版9 1～5層・6・7出土遺物



図版10 6・7層出土遺物



包含層出土石器



整穴住居跡出土石器

図版11 その他の遺物



- | | |
|-------|---------|
| 1・2 | メバル属 |
| 3 | サメ・エイ目 |
| 4・5 | カワハギ |
| 6-9 | タイ |
| 10・11 | ヒラメ |
| 12 | イノシシ中節骨 |
| 13 | シカ下顎骨 |
| 14 | ウサギ上腕骨 |
| 15 | ウミウ上腕骨 |
| 16 | マグロ |
| 17 | アカニシ |
| 18 | ツメタガイ |
| 19 | オオノガイ |
| 20 | イタボガキ |
| 21 | スガイ |
| 22 | イガイ |

図版12 6層出土自然遺物